

## 部活動における勇気づけ

山本卓也・中島弘徳(岡山)

### 要旨

キーワード:

### 1. はじめに

アドラー心理学のグループ体験にもとづく育児学習コース「Passage(以下パセージと表現します)」では、子どもを正しく育てるために、子どもの信念の形成にアプローチする心理面の目標として「私は能力がある。」「人々は私の仲間だ。」の2つを掲げ、この2つ適切な信念があつてはじめて、子育ての行動面の目標である「自立する。」「社会と調和して暮らせる。」が可能になると考えています。これらの目標を達成するための関わりとして、罰ではなく賞でもなく「勇気づけ」という方法での子育てを提案しています。

教育現場において「勇気づけ」に着目した例としては、尾中<sup>1)</sup>が、「小学校で授業の中でも勇気づけるにはどうしたらいいのか」を考え具体例を報告した例や、同じく尾中<sup>2)</sup>が「学校教育目標を具現化するための前提として」アドラー心理学の心理面の目標を掲げ、学級経営を行った例や、國友<sup>3)</sup>が、同じく小学校での実践報告を行っている例があります。「勇気づけ」という表現を主には使っていませんが、アドラー心理学の実践報告としては、稲垣<sup>4)</sup>が保健室での活動を、湯浅<sup>5)</sup>が小学校でのアドラー心理学を活かしている例を報告しています。

今回我々は、部活動において生徒を指導するときも、上記の子育ての心理面の目標のことを常に意識しながら、生徒に関わり部の運営を行うことは重要と考えました。

具体的には、パセージテキスト<sup>6)</sup>を参考に、チームの勝敗、特にどこかのチームとの勝敗や、特定の選手との比較には注目せず、個人やチームとしての取組みの過程を重視し、個人やチームの技術の成長や努力に注目が可能です。そして、生徒には入部当初や折にふれ、「このチームでは結果より過程を重視しよう。」ということ伝えることで、目標の一致がとれると思います。

実際の対応としては、練習や試合中ではチームメイトがミスをしたりアウトになったりしても、それが努力した結果であれば「ナイスアウト!」「ナイスチャレンジ!」など、努力や挑戦したことに対して正の注目となるような声かけをすることによって目標を達成することができると思います。

また、技術面の指導については、こうした方がより良いであろうことの提案を教師は指導すべきと考えます。さらに、この提案は採用してもらえよう、魅力的な提案をするよう努力がいると思いますが、それを最終的に採用するかどうかは生徒に任せることが大事だと思います。

今回は、バッティングの調子を崩した生徒への「勇気づけ」の対応について、経過を報告しつつ、教育場面、特に部活動における「勇気づけ」について報告します。報告にあたっては、山本

と中島が「勇気づけ」の対応について検討し、山本がクラブ顧問として具体的に新たな代替案を提示し取組む姿勢やチャレンジすることに正の注目をして勇気づけて行きました。その結果として技量が向上したという事例について考察を行いたいと思います。

なお、今回の報告に際し、本人・保護者の許可は得ています。

## 2. 実践報告

対象生徒は中学2年生男子（以下 S と呼ぶことにします）、野球経験なし（草野球程度の経験あり）、部の中では身長は中ぐらいで、細身でややパワーに欠けるところもありますが、足は学年でも1・2を争う俊足です。また野球に対しては非常に熱心に取り組んでおり、家に帰っても自主練習をほぼ毎日行なっているようです。

### < X-1 年4月初旬～6月下旬 >

右投げ右打ちでポジションの希望を聞いたところショートを希望。投げ方について違和感は見られなかったのですが、打ち方が気になりました（バットスイングの軌道が波打つ、トップの位置からグリップが下がってしまうなどですが、本論の趣旨とは関係ありませんので省略します）。しかしまだ中学に入学して間もない時期なので、しばらく様子を見守ることにしました。

### < X-1 年8月初旬～9月下旬 >

前出の技術的な面で改善が特に見られず、この期間に出場した練習試合でも思うような結果が出なかったため、気になっているポイントをSに伝えました。2ヶ月間の打率 0.025（0割2分5厘）。

#### ○Sとの会話

T（教師）：ちょっといい？バッティングのことで話をしたいんだけど。

S：はい。

T：スイングを始めようとしたときに、グリップが・・・（気になっていることを伝える）・・・このあたりが気になっているんだけど、Sは何かバッティングしていて気になるところはない？

S：思うようにバットにあたりません。

T：思うようにということは、自分が「だいたいココかな～」と思って振ったけど、実際にはバットにあたらないということ？

S：はい。そうです。

T：じゃあ、しばらく先生が気になってる箇所を点検しながら様子を見てみない？

S：はい。やってみます。

T：OK。じゃあ・・・（具体的な練習内容を伝える）・・・この線で10月からしばらく挑戦してみよう。

S：はい。

### < X-1 年11月初旬～12月下旬 >

若干の技術改善が見られました。その間、Sは熱心に教師が指示した練習を繰り返していました。2ヶ月間の打率 0.048（0割4分8厘）。

○ Sとの会話

T: かなり努力していたし、練習試合でも意識してバットを振ろうとしていたね。

S: はい。

T: どうでしょうか? 打率を見ると上がってきているから、このままの路線でいくか、ちがう路線でいくか。どうしよう?

S: ちがう路線って何ですか?

T: Sは走力があるから、左打ちにチャレンジするということもいいんじゃないかなと思ってるんだ。

S: え! 左打ちですか!?

T: 無理にじゃないよ。ただ、Sの足の速さを考えたら選択肢としてはあると思うけど。

S: お父さんにも「左打ちがいいんじゃない?」って言われたんです。

T: そうなんだ。じゃあ試しに先生の前で左で振ってみてくれない?

S: はい。(と言って目の前で素振りをすると、右に比べて非常にスムーズなスイングになっている)

T: とてもスムーズで良いスイングだと思うよ。

S: ありがとうございます。

T: どうでしょうか。

S: どうしたらいいでしょう?

T: 先生の考えを言っている?

S: はい。

T: 左打ちに挑戦しても面白いと思うけど、右打ちでも少し打率は上がってきているし、どうだろう、もう2ヶ月右打ちの練習を続けて、その間にSも色々考えてみて結論を出すっていうのは?

S: はい。

T: その間、部活中や自主練習中に左打ちを気楽にやってみるっていうのはどう?

S: それでやってみます。

T: じゃあ、また2ヶ月間チャレンジしてみよう。

S: はい。

< X年1月初旬～2月下旬 >

これまでと同じく、Sは努力を続ける。しかし打率の方は前の2ヶ月より落ちてしまいました。2ヶ月間の打率 0.042 (0割4分2厘)。こちらから呼び出そうとする前にSの方から私に話しかけてきました。

S: 先生、やっぱり左打ちに挑戦します!

T: 決心は固い?

S: はい!

< X年2月下旬～現在 >

以下のことをSに伝え、がんばれるかどうか確認をする。

● Sに伝えたこと

①左打ちのフォームを安定させなければならないということ。

②そのためには、素振りやティーバッティングを何度も何度も繰り返して身体に覚えこまさないなければならないこと。

③それは根気のいる作業になるということ。

以上3点を伝えたところ、Sからは「がんばります！」という返事をもらいました。

●私がSを勇気づけるために考えたこと

①できないからといって罰しない。

②努力したことに焦点（正の注目）をあてる。

③できたことに対しては褒める（賞を与える）のではなく“認める”。

④最終的にSが“自分が努力したから”できるようになったと思えるようになる。

以上の4点を意識しながら勇気づけていこうと考えました。その中で①と②については実践するにあたって特に難しいとは思いませんでしたが、③と④の実践は非常に難しかったように思います。特に難しかったのが③の“認める”という注目の仕方でした。取り組みの内容上、どうしても「できた」「できない」という「結果」にも注目をせざるを得ません。そのため、できたこと（結果）に対しては努めてプラスの感情を使わず、冷静に「今のはできたね。」「今のはナイスバッティングだったよ。」などの言葉がけを行いました。とはいえ、生徒ががんばってできた時にはどうしてもこちらに喜びやうれしさなどの感情が芽生えます。そのため、そんなときは言葉を使わず、黙って「うん、うん。」とうなずくだけにしました。そのかわり、努力したことについてはたっぷりとプラスの感情を使って「よくがんばっているね。」「ナイスチャレンジ!」と伝えるようにしました。

また、できなかったときは「次はここを意識してみよう。」や「こうやってみよう。」などの技術的なアドバイスを行いました。Sができないことに対してがっかりしたり、イライラするなどのマイナスの感情を使っているときは、その場を離れて注目しないようにしました。

取り組み初めて2ヶ月後の4月の練習試合でSは左バッター転向後、初ヒットを打ちました（それも2打席連続ヒットでした）。Sの努力を見てきたチームメイトや応援に来ていた保護者の方もうれしそうにしていました。試合後、うれしそうにするSに対して私は「Sは努力してるからね〜。」とこれまでの努力について正の注目をしました。それ以降も現在までSは非常に熱心に部活動に取り組んでいます。

### 3. 結果

左バッター転向後、2月下旬から7月末までのSの打率は0.286（2割8分6厘）と右バッターのときよりも向上が見られました。また、これまでの取り組みについて書いてもらったところ、以下の内容の文章を書いてくれました。

「僕が左バッターに組みだして半年が経ちます。初めはボールにもほとんど当たらず、不安でしたが、がんばって取り組んでいるうちにバットがボールに当たるようになりました。でも、僕はまだまだバントがうまくできません。それがこれからの僕の課題です。後、もう少しパワーをつけてヒットをたくさん打ちたいです。僕の目標は巨人軍の松本選手です。いつか松本選手のように打って守って走れる選手になりたいです。これからも努力をして、そしてチームが全国大会に出られるよう、チームに貢献できる選手になりたいです。」

Sの努力とチャレンジはまだまだ始まったばかりです。今後もSに対する勇気づけを行っていきたいと思います。

## 4. 考察

教育場面での「勇気づけ」については、教育相談的立場の報告以外としては、クラス経営としての報告が多かったと思います。今回は、中学校の部活動での「勇気づけ」について報告をしました。野田と萩は学校が教えるべきこととして「教育の4 S」と呼んでいます<sup>7)</sup>。「教育の4 S」とは、「尊敬・責任・社会性・生活力」のことですが、このうち「尊敬・責任・社会性」は、パセージでの心理面の目標に相当すると考えられます。パセージでは、アドラー心理学の理論から、まず、心理面の目標の達成を掲げますが、子育ての目標としては、心理面の目標の達成だけではなく、さらに、4番目のSに相当する「生活力」を身につけることも重要です。「生活力」とは、「生きていくための知識と技能を身につけていること。」<sup>8)</sup>です。これは、すなわち、行動面の目標に相当すると思います。

部活動という場合は、家庭や教室での日常生活とちがいで、勝敗や賞などの結果が非常にクローズアップされやすい場だと思います。そのため生徒たちは勝敗や結果に関心がいきやすくなり、ときには勝敗や結果のみに関心がいつってしまうこともあると思います。また指導者自身も結果重視になってしまうこともあると思います。今回の事例のように、打率が低いため、技術面の指導が望まれる場面がまさに、本人も指導する側も打率の向上という結果にのみ関心が行きやすい状況だったと思います。

そのなかで、指導する側が、部活動においてもアドラー心理学の子育ての目標を見失わなかった結果、生徒がまず心理面で「勇気づけられた」結果が、S君の「これからも努力をして、そしてチームが全国大会に出られるよう、チームに貢献できる選手になりたいです」と書いてくれていることに表れていると思います。

さらに、今回は、技術的な指導についても、提案という形で行い、S君に選択してもらっていることも効果があったと思います。このことにより、心理面だけでなく、行動面でどうすればよいか身についたことが、よりS君を「勇気ある」生徒になれるように援助できたと考えます。

## 5. おわりに

部活動は、本人だけでなく保護者や同僚の教師なども結果を評価する状況があります。そのような状況の中、アドラー心理学により結果（特に勝敗）には注目せず、努力や過程や生徒のがんばっているところを見つけようとするのが可能になりました。また、勝敗が注目されやすい活動の中でも（本来、部活動とはそういう主旨の活動ではないとは思いますが）、勝敗に注目しないで指導していけるのではないかと思います。

これからもアドラー心理学を実践し学び続けて、生徒を勇気づけ、生徒の力を引き出せるための方法を検討し、実践していきたいと思います。

## 参考・引用文献

- 1) 尾中孝司：「勇気づけ」のある教室をめざして．アドレリアン 22(1)： 33-39, 2008.
- 2) 尾中孝司：授業の中でも勇気づけを．アドレリアン 18(4)： 239-250, 2005.
- 3) 國友通弘：私が教育現場でしていること．アドレリアン 22(1)： 50-52, 2008.
- 4) 稲垣 忍：忍さんの保健室日記．アドレリアン 17(1)： 37-39, 2003.

- 5) 湯浅茂徳：四国地方会に参加して．アドレリアン 22(1): 53-55, 2008.
- 6) 野田俊作：『Passage』アドラーギルド，2005
- 7) 野田俊作、萩 昌子：『クラスはよみがえる』，創元社 ,pp10-11, 2008.
- 8) 前掲文献 7) pp15

#### 更新履歴

2013年9月1日 アドレリアン掲載号より転載